

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 曾 寶満

本論文は、一九三〇年代の日本で論じられていた「地域主義」論が、中国「ナショナリズム」との緊張関係をいかに認識し、表現していたのかを分析するため、当該期の評論家、知識人、政策宣伝に関わった軍官僚、文学者によってなされた、西洋近代文明への批判、また既存の国際秩序への批判の内容を歴史的に跡づけた論考である。

先行研究において、日本を軸とした垂直的地域統合構想への着目、ソ連が内向きに閉じていたとされる三〇年代初頭の合法無産政党の「アジア・インター」構想への洞察など、アジア再編をめざす地域主義論の解明が進んだ。それらの知見に加え、これまで文学の領域ではなされてはいた、評論家から文学者までの当該期の言説分析について、多様な史料を用いて歴史学の立場から政治史として描いたところに本論文の意義がある。

本論文によって明らかにされた諸点は次の通りである。第一に、第一次世界大戦後に登場した評論家らは西洋知への懷疑から、東洋民族や東洋文明といった語彙を多用した。その中で安易な東西文明融合論を批判した田中王堂、中国側の自助に期待をかけ「亜細亜自治論」を展開した杉森孝次郎の論を特徴づけた(第一章)。第二に、三〇年代前半の満洲(中国東北部)と日本の関係を、アメリカのモンロー主義とのアナロジーで正当化した陸軍省調査班員の人的構成と、その論考の内容について、悉皆的な分析を行なった(第二章)。一方で本来のモンロー主義の歴史的意義を正確に知る横田喜三郎や清沢冽は同時代にあって軍の論理を明解に批判し、また国際連盟の制度的欠陥に着目する蠟山政道は、独自の地域的協同体を論じるようになっていく(第三章)。

第三に、日中戦争期から太平洋戦争期にかけて若い知識層に絶大な人気を誇った保田與重郎を取り上げ、一九三八年五月になされた保田の中国旅行の画期性を、史料から新たに詳細に跡づけ、中国を実見した前後における評論の差異を論じた。日本による北京知識人への文化政策を目にした保田の論調は、次第に日本政府批判へと傾斜していった(第四章)。戦争の現実を前に、東亜協同体論者の多くが、中国「ナショナリズム」への対抗へと議論の重点を変化させていったのに対し保田は、日本の占領地統治と中国の民族主義の実際を短期間ながらも実際に垣間見たことで、近代化過程における「ナショナリズム」の発展の段階的な差に自覚的になっていった(第五章)。

本論文が対象とした論説の多様性と、歴史的変遷を追う構成の独創性は高く評価でき、第二と第三の論点について本論文で示された程の実証性を持つ研究はこれまでなかった。前半の三章と後半の二章を関連づける論理が不十分であるなど、未だ論じ切れていない部分は残るが、それは本論文が研究史上に持つ価値を減ずるものではない。よって本委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断する。